



Data

監督・脚本：ユ・ハ
 原作：乃南アサ『凍える牙』（新潮文庫刊）
 出演：ソン・ガンホ／イ・ナヨン／シン・ジョングン／イ・ソンミン／カン・プン／チョン・ミンソン／イ・ミナ／ト・ギソク／チョ・ヨンジン／ナム・ボラ

👁️👁️ みどころ

自分で直接手を下さず犬を道具として使って殺した場合、それは「間接正犯」だが、果たしてそんなことが可能？乃南アサの原作がなぜ韓国で映画化されたのかは興味深い、今ソウルの大都会を狼犬が疾走するのは一体なぜ？そして、それをバイクで追跡する新米女刑事の執念は・・・？

美人すぎる女刑事が1人で主演になれず、ソン・ガンホの助けを借りたのは残念だが、いろいろと考えさせるネタが・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■日本の直木賞受賞小説が、なぜ韓国で映画化に？■□■

私は全然知らなかったが、本作の原作になったのは、1996年に乃南アサが直木賞を受賞した『凍える牙』。しかして、日本の直木賞受賞小説が、なぜ日本ではなく韓国で映画化に？本作のプレスシートの中には、その乃南アサが書いた「韓国生まれの『孫』という「CONTRIBUTION」がある。それを読むと、日本では「映画という孫」の誕生にさまざまな苦労があり、結局誕生に至らなかったことがわかる。

他方、日本では2006年に始まった篠原涼子がバツイチで子持ちの美人刑事・雪平夏見を演ずるテレビドラマ『アンフェア』が大人気となり、以降スペシャル版や劇場版まで製作されたが、それは一体なぜ？そして、乃南アサの原作は2001年には天海祐希主演で、2010年には木村佳乃主演で2度もテレビドラマ化されているそうだが、なぜ映画化にまで至らなかったの？そこらあたりを対比して考えていけば、日本のテレビドラマや映画製作の裏側の事情に迫ることができて面白いのかも・・・？

■□■主役はどちら？ひょっとして・・・？■□■

本作でヒロインを演ずる新米刑事チャ・ウニョン（イ・ナヨン）はたしかに美人だが、何といっても元白バイ警官あがりの新米だから、いかにも頼りなさそう。したがって、ソウルで発生した奇妙な焼死体事件の捜査をソ班長（シン・ジョングン）から命じられた中年のベテラン刑事チョ・サンギル（ソン・ガンホ）は、きっと自殺だろうと推定されるそんな事件を担当させられること自体が不満なうえ、ウニョンのような手間のかかる新米刑事とチームを組めと言われたためにおかぬむり。ところが、科学捜査班の検証の結果、①死体の太股には獣に噛まれた傷痕があり、②尿からは覚醒剤が検出され、さらに③腰のベルトのバックル内からはタイマーと点火装置が見つかり、引火性の強い化学物質が仕込まれていたことがわかると、俄然サンギルはこの事件に興味を示し始めることに。しかし、それはあくまで自分の出世欲のためだから、その動機はイマイチ不純だ。

本作は、後輩のク・ヨン Chol 刑事（イ・ソンミン）に出世競争で先を越されたひがみ根性でいっぱいのようなサンギル刑事と、彼のお荷物のようについて回る新米女性刑事ウニョンの凸凹コンビが主人公だが、さてどちらが主役？古くは『インソムニア』（02年）（『シネマルーム2』197頁参照）でヒラリー・スワック扮する女性刑事が、新しくは去る7月7日に観た『プレイ 獲物』（10年）に登場する女性刑事が、それぞれハードな追跡劇に貢献していたが、本来ハードな刑事役が若い美人女優に荷が重いのは当然。すると男尊女卑の思想が強い韓国では、原作どおりに若い女刑事ウニョンに主役をやらせるのはムリだと考えて、サンギルのようなベテラン刑事を主役に？いやいや、ひょっとして本作のホントの主役は、後半からクライマックスにかけて大きな存在感を示す、チルプン（疾風）という名の狼犬かも・・・？

■間接正犯の典型だが、こんなことホントにできるの？■

刑法総論では「共犯」の章で、正犯と従犯を学ぶが、正犯には間接正犯もある。「間接正犯」とは、他人の行為を利用して自己の犯罪を実現する正犯のことで、本作に見るように、自分が直接手を下さず、訓練した狼犬を道具として使って、人を殺すのはその典型だ。

今は建設会社の社長に収まっているミン・テシク（ト・ギソク）は、元ヤクザらしくその人相はいかにも悪い。この男は昔は売春や麻薬組織に関わっていたようで、映画冒頭に焼死体となった男はその仲間だったらしい。サンギルとウニョンのソ班長への報告を無視した何ともうさん臭い捜査（？）によって、このテシクが闘犬賭博に関わっていたことが判明。さらに、狼犬によって喉元を噛み切られた第2の被害者ナム・サンフン（チョン・ミンソン）、テシクの元恋人で第3の被害者となったミンジョン（イ・ミナ）らもその仲間だったことが判明したから、捜査の焦点が警察犬のトレーナーだったという元刑事のカン・ミョンホ（チョ・ヨンジン）に移っていったのは当然だ。警察犬を扱った映画は『きなき子〜見習い警察犬の物語〜』（10年）など数多いし、南極観測隊に同行したタロとジロを主人公とした心温まる映画もあるが、人間が犬を道具として使って人を殺すことなどホントにできるの？

乃南アサの小説がヒットしたのは、大都会を疾走する狼犬が突如人の前に現れ、その喉元を食い破るという猟奇殺人のもの珍しさが大きく寄与しているはずだが、ホントにそんなことが可能なの？

■□ウニョンの捜査に見る、個人プレーの是非は？■□

ロンドンオリンピックは8月12日閉幕したが、日本勢は卓球や水泳におけるチームプレーが光っていた。一人一人ではメダルに届かなくても、3人が、4人が力を合わせれば、というわけだ。これに対して韓国では、サッカー男子の3位決定戦後、日本に勝利した韓国の朴鍾佑（パク・チョンウ）選手が竹島（韓国名：独島）の領有を訴えるメッセージボードを掲げるという問題を起こしたが、これを見ると韓国はチームプレーより個人プレーの国？本作を観ていると、韓国では警察の捜査でもチームプレーが悪く、サンギルとウニョンの個人プレーが突出していることがよくわかる。

テシクの元恋人で第3の犠牲者になったミンジョンが出入りしていた売春組織のアジトへの「手入れ」を強行した際、名誉の負傷（？）を負ってしまったウニョンはソ班長から「お荷物」扱ひされ、今は1人だけで警察犬の捜査を命じられていた。しかし、地道な捜査を続ければ、時として大きな成果が得られることもある。ソ班長の捜査では、ミンジョンは警察を辞めているばかりか、既に死亡しているらしい。しかし、ウニョンが女性らしく地味で丹念な警察犬捜査を続けた結果、ミンジョンは今も生きていることを突き止めたから立派なものだ。しかし、ウニョンはその情報をソ班長には報告せず、単独でミンジョンが一人娘のカン・ジョンア（ナム・ボラ）と暮らしている古い民家に潜入！たしかに映画としてはその方が面白いし、ウニョン刑事の活躍ぶりも目立つが、何者かに襲撃されて意識を失ったうえ、家に火をかけられたから大変！さて、そんな捜査に見る韓国警察における個人プレーの是非は？

■□そう一気にネタばらしをしてしまっは・・・■□

松本清張原作の小説を映画化した『砂の器』（74年）はハンセン病について大きく社会問題提起をした映画であると同時に、刑事モノとしても最高傑作だった。本作中盤は、新米女性刑事ウニョンの活躍と、次第にウニョンの熱意を認めそれを支援していくサンギルの応援ぶりがポイントだが、焼け跡から見つかったミンジョンの日記によって1つの例外を除くすべての事情が半明してしまうストーリー構成はいただけない。

その日記を読めば、ミンジョンの一人娘ジョンアがどんな酷い目にあっただのか？なぜミンジョンが幼い狼犬をチルブン（疾風）と名付けて長年の訓練を施し、チルブンを使っての復讐を誓ったのかがわかるとともに、今それを着々と実行しているのだということがすべてわかってしまう。しかし、これでは興ざめだ。「わからない1つの例外」とは、地下の訓練場で発見されたマネキンが5体あったこと。4体については、既に死んでしまった3人に加えて現在消息不明のテシクがそのターゲットであることはまちがいないが、もう一人は誰？ラストに向けてはそれが唯一の興味になってしまうが、実はそのヒントも既に提示されているので、私の目にはそれはバレバレ。そう一気にネタばらしをしてしまっは・・・？

こりゃ映画として、あまりに安易すぎるのでは・・・？



(C) 2012 CJ E&M CORPORATION & UNITED PICTURES, ALL RIGHTS RESERVED.

■□■最大の見どころは、チルプンとバイクの疾走シーンだが■□■

イ・ナヨンは『私たちの幸せな時間』（06年）ですばらしい熱演を見せていた（『シネマールーム13』99頁参照）し、『悲夢』（08年）ではキム・ギドク監督の難しい演出に果敢に挑戦していた（『シネマールーム22』232頁参照）。そんなイ・ナヨンが本作では新米刑事役に挑戦したが、私の目にはやはり刑事役には線が細すぎるし、美しい豊かな髪をたらしのままの刑事姿はキレイすぎるから、これでは刑事の仕事はとても無理？と思うところがあるのが本作の難点だ。

したがって、クライマックスに向けて本作最大の見どころとして展開される、疾走するチルプンをバイクに乗ったウニョンが追跡するというシーンもあまり現実味がなく、迫力があまり感じられない。もちろんイ・ナヨンはこの撮影に向けてバイクの練習を積んだはずだから、まっすぐ続く道路上での疾走シーンはもちろん、山中に入ってから追跡でもそれなりの腕前は披露してくれるが、転んでしまった後は・・・？本作鑑賞の前日たる、8月7日の試写会で『ボーン』シリーズ最新作の『ボーン・レガシー』（12年）のメチャ迫力あるカーチェイスとバイクチェイスを観たこともあって、本作最大の追跡シーンの迫力は私にはイマイチ・・・。

■□■究極の選択は？その実行は？■□■

警察犬が犯人に向かって迫っていきけるのは、トレーナーから犯人についての情報（＝句

い)を与えられているから。チルブンとウニョンの疾走シーンを見るについては、それを前提にする必要がある。すると今、チルブンが走り続けているのは一体どこを目指しているの？また、そこには一体誰がいるの？本作中盤からは何かとウニョンの面倒見がよくなったサンギルがタイミングよくウニョンをフォローすることによって、「第五の男」がチルブンの犠牲になるのを避けようとする2人の思いが実現しそうになっていく。もちろん、そのためにはチルブンが飛び掛かる前にサンギルとウニョンが第五の男を逮捕し身柄を確保することが不可欠だが、サンギルとウニョンの力でそれは実現できるの？

8月10日に韓国の李明博大統領が竹島（韓国名：独島）に上陸したことによって、竹島問題は新たな火種を抱えこんだが、さて日本はどんな選択を？まだまだ究極の選択を下す時期ではないが、いずれ近い将来何らかの究極の選択をせざるをえなくなるのでは？しかしてスクリーン上では、今「第五の男」の首に食いついたチルブンの姿が！さあ、ここでサンギルとウニョンはいかなる究極の選択を？そして、その究極の選択を実行するのは、ウニョンそれともサンギル・・・？

2012（平成24）年8月14日記

裁判員制度は3年間で定着！？

1)日本で裁判員制度が始まったのは2009年5月21日。最初の裁判員裁判は東京地裁で8月3日に開かれた。それから3年を経過した今年5月21日、新聞各紙を始めとしてさまざまな検証が行われた。

2)日本の制度は米国の陪審制と西欧の参審制のミックス型で、裁判官3名、裁判員6名で構成され、殺人や強盗致死傷などの重大事件に限定して行われる。

「裁判は専門の裁判官が行うもの」という「常識」が強かった日本では、ハリウッド映画でよく見る米国型の陪審制には抵抗があったはず。したがってその実現は容易でないと私は読んでいたが、司法制度改革が声高に叫ばれる中、あれよあれよという間に実現した。

3)一方では、日本人は勤勉だから裁判員に選ばれればそれなりに義務を果た

すと信じられていた。しかし他方で、自分の意見を明確に主張したり、他人の意見と食い違う場合に激論の末これを組み伏せることは苦手だから、果たして他の裁判員や（職業）裁判官と対等に議論できるの？そんな心配もあった。また私は、重罪ではなく窃盗などの軽微な事件から「慣らし運転」をすべきだと思っていたが、現実はいきなりハードなスタートとなった。

4)3年間で選ばれた裁判員と補充裁判員の数は2万8074人。そして計3690人の被告人に対して判決が言い渡されたが、そのうち無罪判決が17人、死刑判決が14人となっている。これをどう評価するかは難しいが、少なくとも裁判員裁判が定着しつつあることは明らかだろう。

2012（平成24）年10月31日記

莫言さん、ノーベル文学賞受賞おめでとう！

1) 2012年9月11日の野田総理による尖閣諸島の国有化宣言以降、日中関係は冷え込んでいる。そんな中、毎年10月中旬に発表されるノーベル文学賞については、日本の村上春樹と中国の莫言が有力視され、新聞紙上では『文学賞では日中対決?』の文字も踊った。世界最大のブックメーカー（賭け屋）「英ラドブロークス」のオッズ（賭け率）では、村上春樹がトップで莫言は2位だったが、フタをあけてみると、10月11日見事、莫言が受賞！張藝謀監督の映画『紅いコーリャン』（87年）には大きな衝撃を受けたが、その原作小説が莫言の『紅高粱』だ。

2) 2009年4月に神戸国際大学教授に就任した毛丹青氏のプロデュースによって2011年7月26日坂和事務所において、「アジアでもっともノーベル文学賞に近い作家」莫言との対談が実現した。その日に向けて私は莫言の小説『赤い高粱』（86年）、『白檀の刑』（03年）、『四十一炮』（06年）、『転生夢現』（08年）、『蛙鳴』（11年）、『牛 築路』（11年）（写真①）を、人物関係図や年表メモを作成しながら次々と読破するとともに、対談用の詳しいレジメと資料を準備した。その結果、毛丹青の通訳による約3時間の対談は話が弾み、実り豊かなものとなった（写真②）。対談終了後は莫言から自筆で「和風」と大書したうえ、「坂和章平先生は奇人」（これ

は、いい意味!）と書いた書をプレゼントしてもらった（写真③）。さらに私が購入していた彼の著書に一冊一冊丁寧にサインしてくれた（写真④）から、その誠実さにも感激！

3) 対談後は事務所近くの、ノーベル文学賞の先輩である川端康成生誕の地にある料亭「相生楼」で昼食を済ませた後（写真⑤）、温泉の大好きな莫言の希望を受けて有馬温泉へ。超豪華な会員制リゾートホテル「エクシブ有馬離宮」に泊まり、毛さんと3人で夜遅くまで「温泉談義」を展開した（写真⑥）。その時の話題の一つが11年7月23日に温州市で起きた高速鉄道衝突脱線事故だ。

4) この対談で彼の人格に身近に接した私には今回の受賞は最高の喜びだ。莫言さんおめでとう！



写真①



写真②



写真③



写真④



写真⑤



写真⑥

2012（平成24）年11月1日記